

# 変わりゆく〈京都〉と変わらざる〈京都〉

――〈人工〉と〈伝統〉のはざまで

三 谷 憲 正

## 一、はじめに

〈京都〉とは何か。このような問いの答えがそうたやすく手に入るとは思われないほど、京都は奥行きと膨らみを持った空間である。しかし、この問いを全く意識せずに京都について発言することもまた難しいことであろう。本稿はせめてその足掛かりなりとも得たいという試みである。その際、実体としての京都は京都としても、中心的な課題は表象としての〈京都〉にある。すなわち、京都は日本の近代にあって、どのようなイメー<sup>イメージ</sup>象を持って流通してきたのであろうか。高木博志氏は、『近代天皇制と古都』<sup>(1)</sup>（二〇〇六年）の「第4章 古都京都イメージの近代」中で次のように述べている。

・ 古都京都イメージの近代における形成・展開をここで整理したい。一八九五年の平安遷都千百年紀年祭や第四回内国博覧会といった日清戦争前後の国民国家形成期には、対ヨーロッパ、対中国に対する自画像として、京都のみならず日本の表象として「国風文化」を自らのイメージに重ねた。そして韓国併合の一九一〇年代以降の「帝国」の時代になると、過去の「海外雄飛」、キリスト教の布教といった十六世紀後半の「安土桃山文化」が顕彰の対象となる。

・ 「国風文化」が昭和期になると「雅」という言葉に代表され、「安土桃山文化」が一九四〇年代の秋山国三の研究を経て、一九五〇年の林屋辰三郎「町衆の成立」へと展開してゆく。ここに「雅」と「町衆」という古都京都の二大イメージが定着した。貴族の雅は葵祭に象徴され、町衆の自

治は祇園祭として、いずれも京都の年中行事に位置づけられるようになった。「むすびにかえて」

平安時代の「国風文化」が「雅」へと繋がり、「安土桃山文化」が「町衆」へと接続することによって、京都の近代の像<sup>イミジ</sup>が出来上がったという。

本稿ではこの議論を傍らに置きつつも、〈伝統〉と〈近代〉という一見矛盾するかに見える視点から、〈京都〉とは何かに迫っていきたい。(なお、引用に際しては適宜、句読点やふりがなを付した。中でも丸ガッコ内のルビは引用者のもの。また傍線も引用者。以下同様である。)

## 二、滅びゆく〈京都〉

菊池昌治氏は『京都文学巡礼』<sup>(2)</sup>(一九九〇年)の第一章で谷崎潤一郎・永井荷風・谷川徹三・池波正太郎の一文に触れ、「とくに、昨今の京都の都市的変貌は日に日に加速度が増してきている」と二〇〇八年の現在からすると二〇年程前になる時点で記している。これら菊池氏のあげた諸家に他の文人たちの感慨を含めて以下考察したい。

池波正太郎は先の菊池氏の感慨よりさらに一昔前、「散歩の

とき何か食べたくなって」<sup>(3)</sup>(一九七七年)の中で次のように京都に関して述べている。

・東京が失った川や橋や、家並みや鳥の声を、京都はいつも、わずかに温存している。しかし十年前の京都とは、もはや、「比ぶべくもない……」ありさまになってきつつある。十数年前の私には、(京都も、いまのうちだぞ)というおもいが、たしかにあった。(「三条木屋町・松鮎」の章)

もうこのころ「わずかに温存」はしているものの、いわゆる〈京都らしさ〉とは既に過去のものになっていたらしい。昭和五二年の時点で「十年前の京都」とは相当に異なってきた様子がある。とすると「十年前の京都」よりもさらに以前である昭和三〇年代には〈京都らしさ〉は町の隅々に見て取ることができたのだろうか。

その昭和三〇年代の京都に関して『古都』の作者川端康成は「新春随想—古都など」<sup>(4)</sup>(一九六〇年)で次のように述べている。

・古都としての京都の町はやがて壊されてなくなってしまう、戦後のつまらぬ地方都会のやうになつてしまふと、私は京都の人にもいつた。どうふせぎやうもあるまい。

(…) 古都らしい町のまだあるうちに、私は京都をもつとみておきたいと、いまさらのやうに思ふ。

ここではわずかに「古都らしい町のまだある」昭和三〇年代後半の京都が名残惜しそくに語られている。『古都』は京都市内の室町と市街からは離れた北山杉の村（現・京都市北区中川）を舞台とし、『朝日新聞』に昭和三十六年一〇月から三十七年一月まで掲載され、同じく昭和三十七年の六月に新潮社より単行本として刊行されている。日本の戦後を大きく区切る指標として一九六四（昭三九）年の東京オリンピックがあるが、この作品はその直前の京都にあって、和服姿のヒロイン・千重子と杉の村の娘・苗子の織りなす物語であった。では、それ以前においては京都はどうであったのであろうか。

一九二八年に発表された谷川徹三の「京都」<sup>(5)</sup>は過去の京都と昭和の初めを比較して次のように述べている。

・二十年前の京都を知るものは現在の京都が如何に昔の面影を失ったかを慨嘆する。安っぽい洋館が今ほど立ちならばず、けばけばしい看板や広告によつて今ほど街が汚されず、鴨川を電車も走らねば、四条大橋が古風な擬宝珠をもつてゐた時代。さういふ優美古雅な京都に比して今の京都

が如何に猥雑になつたかを慨嘆する。／わたし自身の見聞をもつても京都はかなり変つた。わたしが来た頃は自動車の騒音がこんなになかつた。自動車によつて道路がこんなに悪くされてはゐなかつた。こんなに埃つぽくはなかつた。叡山は未だ神聖な山であつた。安ものの洋館がこんなに巾をきかせず、街で出逢ふ人達の多くがもつと古風で静かで、その言葉はもつと優しく滑らかだつた。

川端康成が「古都らしい町のまだあるうちに」といい、また池波正太郎が「京都も、いまのうちだぞ」と言っていた京都は昭和三年の時点で既にその〈古都らしさ〉を失っていたようである。谷川徹三が京都帝大の学生として過ごした大正一〇年前後の京都は「優美古雅」であつたらしい。ではその大正年間はどうだったのであろうか。

永井荷風は「十年振——一名京都紀行」<sup>(7)</sup>（一九二二年）の中で京都を次のように描いている。

・京都に遊ぶのはこの度が四回目である。明治三十年の頃父母に従つて遠く南清に遊ぶ途すがら初めてこの都を見物した。次は明治四十二年清秋の幾日かをこゝに送つた事があつた。三度目は慶応義塾大阪講演会の帰途であつた。

(…)それから十年を過ぎた。十年ぶりに来て見た京都の市街は道幅の取広げられた事、橋梁河岸の改築せられた事、洋風商店の増加した事、人家の屋根の高くなつた事など十年前の光景に比較すれば京都らしい閑雅の趣を失つた処も少なくはない。嘗て一度眺め賞してより終生忘れることの出来ないやうに思つた彼の出町橋(でまちばし)あたりの寂しい町端の光景の如きは、今日再び尋ねやうとしても尋ねる事の出来ぬものとなつてゐる。(「二」章)

「明治三十年の頃」とはその年の九月、弟たちも含めた家族で上海に行く途中のことであり、また「明治四十二年清秋」とはやはり九月のことであつた。三回目は大正二年の八月の来京だったが、その折りの印象と今回四度目のそれを比べて「十年前の光景に比較すれば京都らしい閑雅の趣を失つた処も少なくはない」と言う。「出町橋」すなわち賀茂川と高野川が合流する出町柳あたりを「今日再び尋ねやうとしても尋ねる事の出来ぬものとなつてゐる」と既に大正年間に懐かしがっているのである。

では荷風が求めた「十年前の光景」以前の明治時代はどうだったのであろうか。谷崎潤一郎は明治四五年の四月、神経衰弱に苦しみつつも京都に遊んだ。その折りの見聞が「朱雀日

記」<sup>(8)</sup>(一九一二年)である。

・京都は勿論の事、奈良へ行つても鎌倉へ行つても、過去の時代の面影は、跡方もなく現代の勢力の下に蹂躪されて了つて居るが、京都は比較的此の憾みが少い。尤もつい近頃は、市有電車が始まつて、ドシドシ旧態が破壊されつゝ、あるから、京都の昔を偲ばうと思ふ者は、一日も早く遊覧に出かけるが肝腎である。(「葵祭の後」の章)

ここでも「旧態が破壊されつゝある」京都を憂い、「京都の昔を偲ばうと思ふ者は、一日も早く遊覧に出かけるが肝要」と警告を発している点などはまるで先に見た川端の一文と同じ発想であると言えよう。

さらにまた谷崎より数年前の一九〇七(明治四〇)年三月、高濱虚子は下鴨の狩野亭吉宅(かのうけいさき)に逗留している漱石に会いにいった。その折りの随筆「京都で会つた漱石氏」(『ホトトギス』一九一七年一〇月)の中で次のように述べている(竹島千寿氏教示)。

・下鴨のあたりの光景は、私が吉田の下宿に居た時分に比べると非常に変化してゐた。以前の京都では見られなかつた

東京風の家が建つてゐた。

虚子が「吉田の下宿」にいたとするのが、一八九二、三（明治二五、六）年頃の第三高等中学校に通っていた時期を指すのであるならば、既に一五年程も昔のこととなる。その昔と明治四〇年の今を比較し、激しい変化を感じているのである。

以上見てきたように、どの時代においても「旧き良き時代の京都」が日一日と摩滅し、〈京都らしさ〉が無くなっていくのを嘆く言説に満ちている。このような心性のありかたはどう理解したらいいのであろうか。ただ単に一文学者、一文化人の個人的感慨では済まない何ものかがここには秘められているのではないか。

おそらく先ず、〈ありうべき京都〉という像<sup>イメージ</sup>があり、時代が下るにつれ、そこから逸脱していく〈京都〉を嘆ずる、という図式があるように思われるのである。

### 三、近代化される〈京都〉

明治年間から昭和の初年代までは、関西の文化圏は関東のそれを凌駕し、むしろリードしていたと言っても過言ではない。大正初めには、関西圏では京阪電鉄や大阪電軌（現近鉄奈良

線）、あるいは南海鉄道（現南海本線）、箕面有馬電軌（現阪急宝塚線）が各地を結び、ほぼ電化を完成させていた。一方、東京では東急、小田急は開業すらしておらず、東武鉄道、武蔵野鉄道（現京浜急行線）は未電化であった。京都に限ってみても、琵琶湖疏水による水力発電を成し遂げ（一八九〇年）、日本初の市街電車（京都電気鉄道）を走らせていた（一八九五年）。

「旧き良き時代」から逸脱していく〈京都〉とは実は近代化の進む京都のまた別の側面であったのであり、京都とは〈人工〉の都市であったのだった。そのように京都は近代的な要素を多分に含みながら時代を生き延びてきたのである。

従来京都は〈人工〉によって〈伝統〉が失われていく過程として把握されてきたように考えられる。これは先に引用した多くの文学者が嘆いていた心性である。しかしそうではなく、京都という都市は明治年間から〈人工〉と〈伝統〉、すなわち〈近代〉性と〈保守〉性とが相互に補完する形で生き延びてきたのではないのか。

明治期の一断面として博文館『太陽』に次のような記事がある。紫明楼主人の「京都の新案内記」<sup>9</sup>（一八九五年）は間近に迫った「平安遷都千百年祭」と「第四回内国博覧会」に臨んで「三年前から京都の三大事件の一大事件とし、一時府下に喧し

かりし平安遷都千百年の紀年祭も、兎(と)鳥(と)東西、いつしか茲(ここ)に明治二十八年を迎へ、本年四月某の日を以て執行せられんとし、平安神社の建立も既に竣功(マツ)に近く、模造太極殿の碧瓦(へきぐわ)丹楹(えい)は、東山煙靄(えんあい)の中に隠見し、朝日夕暉(ゆうひ)に相映じ、美観言ふ可くもあらず」と京都を紹介している。「兎鳥」とは月日の過ぎ去る速さであるが、行事が目前に迫った今、太極殿を模した平安神宮の碧い瓦と「丹楹」すなわち赤い柱が東山をバックによく映えている様を叙述している。さらには

・又第四回内国勸業博覧会場は、工事意外に進みて、早や疏水運河に、大厦巨屋(たいがきょおく)の参差(さんさ)の影を倒(さか)まにす。かゝればやがて博覧会開け紀年祭行はるの日、この旧都の繁華熱鬧(わつたう)は今より想ひ遣らるべし。

と述べ、博覧会会場の大きな建物が「参差」「しんし」ともすなわちまちまちの高さで疏水に映っていることを伝えている。その上で、次の一文は重要である。

・一時衰微を極めたる数年以前の京都に比ぶれば、日を同うして語る可からず。殊に明治文明の余沢とも謂はんか、昔時(むかし)は絶えて見るを得ざりしこと数多出来て、市街には電

氣車走り、インクラインには船、山に登り、京鶴鉄道の布設、亦嵯峨嵐山の花期に負かざるべく、耳塚の彼方には、帝国博物館の新築、石室巍然(ぎぜん)空に聳(そび)えて大仏と背比べせんとす。

ここで列挙されている近代化の象徴とも言える「電氣車」すなわち電車や明治初期の巨大な土木工事であった疏水の「インクラン」、また一大西洋建築であった「帝国博物館」などがどのような角度で紹介されているかは「明治文明の余沢」という語句からもうかがい知ることができよう。

紫明楼主人こと中川四明の「京都新案内記」は続いて「第三号」<sup>⑩</sup>でも次のようにも言う。

・万治年間の著者が記す所、既に右の如し。祇園の古来賑はしきは自(おの)ずから知られぬ。口惜しや今は鞆の音など云ふ優(ゆう)にやさしきもの聞えねど、西洋靴の音は、赤髻(せき)子の往来(ゆき)繁ければ絶ゆることなし。楼門は維新前、回祿(かいりく)の災に罹りしも、今は旧(もと)の如く建ち、神樂堂さへ近頃又新らしう出来たる上に、昔しは大相撲の興行場となりし北林も、今は公園となり。其涯限(かへん)の怪しげなる家は皆取除られ、殊に東方の一樹の垂糸桜(しだざくら)は、夜桜の本尊様、電弧燈(アークとう)の後光(ごくわう)をかり

て光明<sup>ひかり</sup>を放ち、四方<sup>あたりまは</sup>眩<sup>くら</sup>ゆきほどに美しく尊<sup>たっと</sup>くなりたり。

祇園近くの八坂神社、あるいは円山公園界限を叙述している一節である。祇園に「鞠の音」はしないが、その代わりに「西洋靴の音」が赤い髭を生やした西洋人の「赤髯子」が行き交う。八坂神社の門は「回祿の災」すなわち火災にあったものの、今は立派に再建され、例の有名なしだれ桜が「電弧燈」に照らされてまばゆいばかりにその艶なる姿を表している様をとらえている。ちなみに市内九ヶ所にアーク灯が点灯したのは一八九二（明治二五）年の三月であった<sup>(11)</sup>。

ここにあるのは近代化を喜ぶ筆者のまなざしである。近代化とは実は西洋化に他ならないとすれば、西洋化こそが進歩だと考える時期がかつてあったということは改めて言うまでもないことであろう。中川・紫明楼主人はまたこのようにも言っている。

・円山 正阿弥<sup>しやうあみ</sup>、左阿弥<sup>さあみ</sup>など云ふ多くの楼ありしも、今は也阿弥<sup>やあみ</sup>に皆併吞せられ、円山と云へば、唯外国<sup>ホテ</sup>人の旅館<sup>ル</sup>と云ふ姿に移り変りしこそ、京都の為にはいと目出度けれ。四時共に絶えず滞留の客多し。今年の如きは幾百幾千幾万人に至かも知る可からず。

見てとれるように外国人の利用する「旅館（ホテル）」が建つことは京都にとっては大変喜ばしいことなのである。この「也阿弥ホテル」はピーエル・ロチが

・そのアドレスをわたしのゼン（引用者注・人力車夫）に教えておいた、也阿弥ホテル<sup>ヤアミ</sup>に乗りつけるための気狂いじみた疾走半時間。それはある日本人が、西洋からきた愛すべき旅行者たちを泊めるため、英国風に普請したばかりの真新しい本物のホテルであるらしい。で、何か食べ物をみつければよいとするには、どうしてもそこへ行かねばならないのである。日本料理はせいぜい眼を楽しませるだけだから。／ホテルは、市街をとりかこむ山の中の、五十メートルの高台に、庭や林のあいだに瀟洒な姿で位置を占めている<sup>(12)</sup>。

と、芥川の「舞踏会」への関わりから注目されることの多い『秋の日本』（原文一八八九年）で描出したホテルであった。「也阿弥ホテル」は明治一二年開業で客室は四〇。京都でホテルを名乗った最初のものであったという<sup>(13)</sup>。ちなみに、東京の帝国ホテルが開業するのは明治二十三年一月のことであった。

先に引用した記事の紫明楼主人・中川四明にとっては、谷川徹三が言う「安ものの洋館がこんなに巾をきかせず」にいた

“旧き京都”が無くなることには何の感慨も抱いていないように思われる。この点が特に注目される。

このように見てきた明治三〇年前後の京都、すなわち多くの近代の文人が懐かしんだ一九世紀末葉の過去の京都を年表でたどってみると以下のようになる。

一八八七（明治二〇）・九 インクライン、南禅寺の新路開通。  
一八八九（明治二二）・四 市政施行。同・七 京都電灯会社開業。

一八九一（明治二四）・五 蹴上発電所設置。

一八九二（明治二五）・三 市内九ヶ所にアーク灯点灯。

一八九四（明治二七）・一 京都電気鉄道会社設立。

一八九五（明治二八）・四 第四回内国勸業博覧会開催。同・

一〇 帝国京都博物館（現京都国立博物館本館）完成。この年、常磐ホテルを京都ホテルと改称。

一八九七（明治三〇）・九 京都帝国大学理工科大学開学（文科は三九年）。

一八九八（明治三一）・三 都ホテル開業。同・一〇 京都市役所開庁。初代京都市長に内貴甚三郎が就任。

一九〇二（明治三五）・九 京都高等工芸学校開校。

ここから窺い知れることは、実は京都という都市は近代化の路線をひた走りに走ってきた都市でもあったということである。

#### 四、〈山紫水明〉の思想

京都が近代化の道をひた走りに走ってきた、という側面があるのは前節までに見てきたとおりである。しかし、また一方奇妙なことに京都を表象する語句として、「山紫水明」あるいは「山紫水明」という形容が時代を問わず、多く使われている一面も注目に価する点である。

例えば、同じく『太陽』における平出鏗二郎「京都氣質」<sup>⑭</sup>（一八九五年）では京都は次のようにいわれている。

・京都の地方的気習それ斯くの如し。余はこれを以て遠く平安奠都以来遺伝せられたる気習なりと信ず。此地や山美はしく、水清らかに、山水明媚の勝地として大いに衆庶の情感を動かすべく、桓武帝この地に都を遷したまひしより、時代は太平にして、土地は閑雅なりしかば貴紳さながら此間優遊して政治の得失を忘れ、率分堂に草の生ずるをも念頭に置かず、山莊別墅、京の近郊に並び建ち、源融の河原院の如きは、台閣、泉石、華麗を尽くし、山を築き



て花卉<sup>(かき)</sup>を栽え、池を穿ちて日日難波の潮二十斛<sup>(こく)</sup>を汲みてこゝに運ばせ、塩を煮て、陸奥塩釜の勝概に比せり。

貴族たちが政治を顧みずその「得失を忘れ」て、官物を一定の割合で納める「率分堂」(「率分所」「率分蔵」とも)の空っぽになってしまったのは、京都が山うるはしく水のきれいな、「山水明媚」な風光であつたからである、という、そうした景勝地のもたらす遊情を問題にしているのである。筆者平出は続編の「京都氣質<sup>(15)</sup>」でも同じように京都を位置づけている。

・嗚呼、此地それ何たる地ぞや、額に箭<sup>(や)</sup>は立つとも背には立てじ、といふ東国武士も一たび此地に来れば、猶<sup>(なほ)</sup>は春風の嫋<sup>(じょうじょう)</sup>々たるの観あり。然れども若し此地に遊びて、一たび山水の明媚なるに接せば、蓋し其疑は自ずから消滅せんか。

こわもての関東武士の面々もこの都へ来るとろけてしまいうらしい。その一端が「山水の明媚」に求められている。ここである「山水明媚」とは、明治期の辞書『新編漢語辞林』<sup>(16)</sup>(一九〇四年)によれば「山水」は「ヤマトミズト。」であり「明媚」は「アザヤカニウツクシイ(ケシキノ)」のことであるとい

う。「山水明媚」という語句では採られていないものの、現在の意味と大きなずれはない。

このように京都の風景をこよなく美しいとする言説は枚挙に暇がない。その中でも特に注目しているのは「山紫水明」という語句である。

「山紫水明」とは既出の『新編漢語辞林』によれば、「山紫水明(サンシスイメイ) スベテ、山水ノケシキノイノヲホメテイフコトバ。」とある。なぜ「紫」が使われるのかといえ、それには次の説明がわかりやすい。『大日本国語辞典』第二卷<sup>(17)</sup>(一九二八年)によると次のとおりである。

・さんしーすゐめい(山紫水明(句) 日に映じて山の翠は紫に、澄める水はさやかに見ゆること。又、山水の清麗なること。

ここでは昼間の陽光に照らされた山の色を称して「紫」としている。が、『大言海』第二卷<sup>(18)</sup>(一九三三年)ではこのように説明されている。

・さんしーすゐめい(句) 山紫水明(紫トハ、山ノ翠色ノ、夕月ニ映ジテ、紫色ニ見ユル意) 山水ノ景色、明美

ナリ。頼山陽、京都ノ加茂川ノ西岸ニテ、東山ニ面シテ、  
住居ヲ占メ、山紫水明処ト号シタリ。

山々の「翠」を「紫」に見ている点は一致しているものの、前者の『大日本国語辞典』とは異なり、『大言海』では「夕月ニ映ジテ」としている点が大きな違いであろう。さらに後者では『日本外史』で有名な頼山陽の「山紫水明処」に言及している点が目される。「加茂川ノ西岸」すなわち右岸、荒神橋近く、東山を望む東三本木の地は志賀直哉『暗夜行路』第三の舞台でもあった。ともあれ、「山紫水明」とは風景の美しい様子を形容している語句であることは疑いない。

この「山紫水明」は、三宅青軒「京都の秋冬」<sup>(19)</sup>(一八九六年)では以下のように描かれている。

・東山翡翠の色は、寝く淡く、寝く濃く、暮靄の衣は、徐ろに暗紫の彩を施して、所謂山紫水明の情景、髣髴パノラマの如く現る。斯くて水に星あり、山に月あり、一天紺碧の夜に入れば、山、暗牛の臥すが如く、川、白刃の横はるに似て、一味清冷、人をして静寂の感に堪へざらしむ。是れ秋の情趣なり。

ふりがながなければたやすくは読めない文体の中に「パノラマ」と言った語彙が入っている点に興味は持たれる。が、ここで見てとれるように「水」は「川」であり、具体的には「賀茂川(鴨川)」を指し、また「山」とは「東山」ということになる。とすれば「山紫水明」とはただ単に風景の美しさを一般的に形容するのではなく、ある場合には地域的に限定した使い方がされるのではなからうか。

無署名の「京都市幸啓」という記事が『太陽』第三巻第七号<sup>(20)</sup>に載っている。明治天皇・皇后の里帰りともいべき京都市に關しての一文である。

・畏くも 天皇皇后兩陛下には、先帝御三十年祭、並に英照皇太后御大葬の砌御不例の故を以て京都市幸啓の御事も、一旦御見合と相成りしも、御百日祭も本月二十日御挙行の筈なるに就ては、来る十五日頃には、東京御発輦、京都へ行幸啓あらせらるべき様に、御内定相成りし由、漏れ承りしが、京都は聖上御誕生の地と云ひ、殊に山媚水明の風光を愛でさせ給ふこと深く御座ませば、通常の行幸啓におはさんには、御駐輦の日数も重ねさせ給ふなれど、今回は御喪中のことにしあれば、単に先帝並に皇太后御陵墓御参拝に止めさせ給ひ、御祭典相済まば直ちに御還幸あら

せらるべき御内定なりとぞ、大御心のほどこそ畏れ。

「先帝」とは父の孝明天皇を指し、「英照皇太后」とは明治帝の実母である。ともに東山の今熊野にある後月輪東北陵に埋葬されているが、この文脈の中で「京都」という語は「山媚水明」という語と結びつき使われている点に注目されよう。

また樗牛・高山林次郎は東京の他に帝国大学をつくるに際して、「京都帝国大学に就きて」<sup>(21)</sup>という論説で次のように京都の立地条件の良さを挙げている。

・顧みて京都の天然を見る。山紫水明の境、幽静閑雅の地、神を澄まし思を凝らすに於て、東京熱鬧の巷に孰れぞや。日夕、身辺を囲繞せる歴史的天然は、思想の脩育、感情の醇化に資する決して小 少なからざるべし。

改めて説明するまでもなく、「京都の天然」を評して「山紫水明」といい、歴史にもたびたび登場する「天然」はいい影響を及ぼすことを強く主張しているのである。

このような見方は高山樗牛だけではない。『新体詩抄』でも有名であるが、帝国大学総長だった外山正一の次の「京都の教育」<sup>(22)</sup>（一八九九年）にも窺えるものである。

・京都は古より工芸美術を以て天下に鳴れり。寺院の建築、其内部の装飾、絵画、彫刻、織物、染物、園芸の発達、之を西洋諸国に比するも決して遜色あること無し。即ち京都の特色は工芸美術なり。而して京都が其の特色を発揮するに便利なるは、（…）。

・第一、何れの国に於ても美術と国史と関係を有せざる無く、歴史が美術の材料たること多ければ多きだけ、其の美術は益々高尚となり雄大となり、莊嚴となり、優美となるものなり。我國の歴史は直接に間接に殆んど京都と関係せざるもの無しといふも不可ならず。

・第二、京都の山紫水明の風色は亦美術に好材料を供し、（…）。

・第三、京都人士の優雅にして秩序的なるは、確に美術家たるに適せり。

これには京都府教育会総会での演説と末尾に付記されている。京都がいかに「工芸美術」方面に適している地なのかを述べている中に「山紫水明」という見方が登場してくるのである。

またほぼ無署名に近い「東京非詩人」は「京都詩人に告ぐ」<sup>(23)</sup>（一八九九年）という文章で以下のように使っている。

・西都詩人たるもの、少しく其胸襟を広くして、共に丹釀<sup>（たんじよう）</sup>の黄なるを酌<sup>（しやく）</sup>み、墨を鴨東の雪児<sup>（せつじ）</sup>に磨せしめ、山紫水明の楼に团欒して、花紅柳緑、各自適の詩を賦して可なり。多くもあらぬ西都の詩人の、何ぞ互いに一隅に割拠して、党同伐異の俗態を学ぶ事を須<sup>（もと）</sup>いんや。

「西都」とは「東京」に対して京都を意味する語であるのはわかりやすいが、「丹釀」が兵庫県の伊丹<sup>（いたみ）</sup>地方で醸造した酒を指し、「雪児」が芸妓のまたの呼び方である、ということとは既に理解しにくくなっている。鴨川を東に渡った祇園の茶屋で芸妓に墨をすらせて詩を作ればよいのであり、仲間割れをしている時ではない、というのであるからおそらくは京都在住の関係者ではあろうが、そのような文脈の中で「山紫水明」という語句が使われているのである。

このように明治三〇年前後を見るだけでも「京都」は「山紫水明」であり、「山紫水明」とはとりもなおさず「京都」であった。この標語はそれ以降、変わらずに「京都」を修飾する語として必ずと言ってよいほどについてまわるのである。たとえば、以下は昭和七年刊行の松川二郎『三都花街めぐり』<sup>（24）</sup>の一節である。

・『京都そのものがすでに一つの大きな歓楽郷だ』さういふ時、特につく／＼と、さう云ふ風に感じられるのであった。古い都であり、山紫水明の都であり、そして美人の都である京都は、つまり歓楽の都である。そこには東京にも大阪にもない所のおつとりした一種の情調がある。

松川二郎は現在で言えば旅行ライターとして、行かない歓楽街・温泉地はないのではないかと思われるほど各地を歴訪し、その成果を多くの著作に残している。その松川が京都をやはり「山紫水明」と述べているのである。

この形容は戦後を経て、平成になっても同様に続く。先の京都市長舩本氏は二〇〇三年の新年に次のような挨拶<sup>（25）</sup>を寄せている。

・（…）世界文化遺産に登録されている二条城の築城400年を記念する行事をはじめ、京都が誇る寺社やまち並みを灯りの道でつなぐ「京都・花灯路」や山紫水明の美しい京都を舞台に開催される「第3回世界水フォーラム」における多彩な取組などを通じて、1200余年にわたる悠久の歴史の中で育まれた「世界の京都」の魅力を国内外に発信してまいりたいと考えております。

この姿勢は、次の門川大作第二六代市長にも受け継がれる。

・京都の「まち」は、それぞれの地域が、山紫水明の自然と調和を保ちながら個性的な色を放つステンドグラスのようなまちです。また、京都の「ひと」には、進取と創造の力を秘めた町衆の自治の伝統が脈々と息づき、自立の気概に溢れております。私は、そんな京都が大好きです（二〇〇八年二月二五日）<sup>(26)</sup>。

「町衆の自治」とは本稿冒頭で触れた『近代天皇制と古都』での問題にも関わる語であるが、そのイメージと合わせて、ここでもやはり「山紫水明の自然」が京都を表象するものとしていまなお健在であると言っても過言ではない。

## 五、『読売新聞』の「山紫水明」

電子コンテンツである『明治・大正・昭和の読売新聞』は創刊の一八七四（明七）年から一九六〇（昭三五）年の記事を検索できる。これで「山紫水明」を調べてみると、二〇件の記事が浮かび上がってくる。その中で最も早い例が次のものである。

一八九三（明二六）年一〇月一日朝刊（「雑報」欄）「鴨川の美観を保存するの建議」

・今回京都府地方衛生会長より千田知事へ提出せし鴨川の美観を保存する建議と云ふハ、元来鴨川と東山ハ京都市の二大美観にして山紫水明の名も此より出で、清淨優雅の評も此に胚胎する訳なるに、近來鴨川改修の事怠り勝ちと為り居れば、折角の名所も廢退に帰すべしとて、同川々筋字出町橋より七条までの間に左の改良を施されたし、とのことなりしと。

千田知事とは北垣国道の後を継いだ千田貞暁<sup>せんただあき</sup>のことであり、京都市長を兼ね、一八九二年七月から翌年の十一月まで就任していた人物である（『京都大事典』）。興味深いのは既に明治の中頃、鴨川の汚れが問題となっていたことであり、また「山紫水明」とは東山と鴨川という具体的な山川を指しているという指摘であろう。どのような改革が提言されているかといえはその一つに「鴨川沿岸の水車場に関する制裁を設くる事」というものがある。現在からすると牧歌的に見える「水車」も当時はある程度の制約をしなければならないものであったようである。以下主な記事を掲出してみると次のようである。

一八九四（明二七）年一月一五日期刊「九鬼隆一が美術的京都論を語る」

・庶<sup>こひねがは</sup>幾くバ、我京都が山紫水明の風光と共に、堅実、精工、勤勉、優雅、高尚の美風を千歳<sup>さい</sup>に維統し富源を開き、国利を増す、敢て難<sup>かた</sup>きにあらず。

一九一五（大正四）年五月二九日期刊「タゴール氏来朝せば（三）」

・彼より何事を啓発せられ 我より何物を提供せん乎  
第一は我が山紫水明（…）彼の眼に如何に我が明媚なる山水が映るであらうか。（…）我が山紫水明、タゴールの乗船が日本に近づくや否や、彼は先づ之れに心を奪はれるであらう。

一九六四（昭三九）年一二月五日期刊「詩情の松江」（「茶の間席」欄）

・糸柳の影を静かに流す掘り割りの水は、山紫水明の京都を連想させて古くから小京都の名があるが、そのおもむきある情緒ははるかに京都をしのぐ。

一九六七（昭四二）年五月二五日期刊「朱牟田夏雄<sup>しゆむたなつお</sup> わたしの

#### 風景論

・中学以来国語の教科書で教わった風景讃美の形容詞を思い浮かべて見ても、京都は山紫水明である、瀬戸内なら風光明媚（めいび）、霊峰富士の姿は常に「秀麗」であり「白雲さかさまにかかる」と相場がきまっている。

一九六七（昭四二）年六月二六日期刊「公害」（「世論の広場」欄）

・犠牲者、氷山の一角 対策、一時も猶予できぬ  
「山紫水明」―これは日本の自然の美しさを象徴することばであった。／だが、最近の日本の多くの都市はどうであろうか。

一九七〇（昭四五）年五月二一日期刊「山紫水明 今は昔 鴨川をよぐす京友禅」（連載「川は死んでいる⑥」欄）

・京都の代名詞「山紫水明」は、江戸末期、鴨川のほとりに住んでいた頼山陽が、書齋を「山紫水明処」と名付けたのがいわれだとか。水明の鴨川は「京都の顔」だ。それが、濁っている、古都の面影も、国際観光都市の名誉もかたなしなのである。

一九七〇（昭四五）年七月一〇日朝刊「やればできます 山紫水明の文化国家」（聞きたい・言いたい）欄）

・東京都水道局玉川浄水管理事務所水質課長 小島貞男さん  
「（…）水の悪い欧州では昔から浄水場に『水の味見師』がいるんですが、ここでも三年前から所員が毎日味見をするようになった。情けないことです。」／山紫水明の日本が、先進国並みによかれた証拠。

以上代表的な用例を挙げてみた。ここからわかることはタゴールの記事と玉川浄水の記事ではその範囲は「日本」に広がっているものの、多くの場合「山紫水明」が使われるのは京都が出てくる時である。しかし、それよりもさらに注目すべき点は、変わらないはずの自然である「山紫水明」も実は時代の影響を受けていたという証言である。

## 六、おわりに

近代化を推し進める〈京都〉とまた一方には「山紫水明」という自然の景観を守り続ける〈京都〉と。先にも述べたようにこの両者、すなわち〈近代〉的であることと〈保守〉性とは一対となって京都の魅力を担ってきたのである。二〇〇五年七月

一四日朝刊『京都新聞』に「ハイテクの炎揺らめく 放下鉾提灯 ろうそく再現」として次のような記事が掲載されている。

・祇園祭の放下鉾（京都市中京区新町通四条上ル）に十三日夜、ろうそくの炎のように光が揺らめく駒形提灯が取り付けられた。京都大桂キャンパス内のベンチャー企業が、ハイテク技術を駆使して作製した。光を象徴する鉾頭を持つ放下鉾の前後に並んだ約七十の提灯が柔らかな光を放ち、そぞろ歩きの観光客らの心を和ませた。／半導体やコンピュータ設計のアーベル・システムズ（西京区）が、特許の高感度センサーを使い、微風やお囃子の音色を感じて電球が炎のように明滅する提灯を開発した。「ハイテク技術を伝統ある祭りで活用したい」と無償提供を申し出たところ、昔ながらの明かりの雰囲気を出しようと放下鉾が試験的に導入した。

ろうそくの明かりのように燃え盛りあるいは消えかかりして照らす幾つもの提灯が将棋の駒の形に吊されている祇園祭の夜の風情。ここには、祇園祭という〈伝統〉性を最先端の科学技術が補う構図が読み取れる。

また、二〇〇七（平一九）年四月一三日朝刊『京都新聞』

の、葵祭のヒロイン齋王代に関する次のような記事が目を引きく。

・母娘二代齋王代に森川さん 第五二代 留学経て英語講師  
京都三大祭のトップを飾る葵祭（五月十五日）の第五十二  
代齋王代に京都市左京区の英語教室講師森川香絵さん  
（二六）が決まり、十二日、発表された。／母の薫さん  
（五八）も四十年前に第十二代齋王代に選れており、母娘  
二代で祭のヒロインを務めることになる。母娘の齋王代の  
誕生は一九八九年以来十八年ぶり。／森川さんは眼鏡販売  
会社社長森川勇さん（五九）の長女。京都市生まれで、  
ノートルダム女学院の小中高校を卒業後、同志社大法学部  
で憲法などを学んだ。在学中、英国と米国に短期留学。卒  
業後は関西学院大大学院に進学して英語による教授法を学  
び、英語教室では先生を目指す人も教えている。茶道や料  
理も習い、昨年の齋王代・藤田菜奈子さんとも親しい間柄  
だという。（…）同席した薫さんは「母娘で選ばれ幸せで  
す。今回は齋王代の母として、サポート役にまわります」  
と喜びを語った。最後に香絵さんが「こういう機会をいた  
だいて光栄です」と得意の英語で感謝を表した。

京都の初夏を彩る葵祭の齋王代を母と娘と二代にわたって務め

ることも充分ニュース性があるが、それに付け加えて、若き齋王代がいかに欧米文化に慣れ親しんでいるかを強調している点  
が興味深い。学校に関しても「ノートルダム・同志社・関西学  
院」といずれもキリスト教系の学校であり、かつ留学経験を持  
ち英語に堪能である旨も記されている。

〈近代化〉とはとりもなおさず〈西欧化〉に他ならないとす  
れば、「英語」とは先端性を表す指標であろう。そのような教  
養を背景とするからこそ〈伝統性〉を重んずる齋王代になる資  
格を有しているという文脈は、敷衍していえば〈京都像〉その  
ものにほかならないのである。

確かに〈伝統〉ということだけであれば、奈良にさらには飛  
鳥には及ばない。しかし、おそらく京都の魅力とは、飛鳥や奈  
良とは異なり、〈近代性〉を前面に出していくところに存して  
いるのではないか。実は「山紫水明」とは、歴史という人の  
手・人工の手が加えられた、いわば撫育された雅びな「自然」  
のことではなかったのか。文化や文明をふんだんに吸収した風  
光。『手つかずの自然』などはないのである。

今後古き姿の時間を止めてその場にとどめようとする京都  
論は出てくるだろう。が、しかし〈京都〉はむしろ積極的最  
先端の〈近代〉的な技術を追求しつつ〈伝統〉性を保持してい  
くように思われるのである。



注

- (1) 高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店、二〇〇六年七月。
- (2) 菊池昌治『京都文学巡礼』(三一書房、一九九〇年九月)「第一章 旧京都」。
- (3) 池波正太郎『散歩のとき何か食べたくなって』(平凡社、一九七七年十一月)。
- (4) 川端康成『新春随想—古都など』(『毎日新聞』、一九六〇年一月一日朝刊)。
- (5) 谷川徹三『京都』(『近代風景』、一九二八年二月。ただし引用は『生活・哲学・芸術』、岩波書店、一九三〇年九月、による)。
- (6) 谷川は「明治二十八年(一八九五)五月二十六日、愛知県知多郡常滑町(常滑市)の商家、谷川米太郎の次男に生まれる。第一高等学校を経て、大正十一年(一九二二)京都帝国大学文学部哲学科を卒業」(『日本近現代人名事典』吉川弘文館、二〇〇一年七月)。
- (7) 永井荷風『十年振—一名京都紀行』(『中央公論』、一九二二年一月。ただし引用は『荷風全集』第一五巻、岩波書店、一九六三年十一月、による)。
- (8) 谷崎潤一郎『朱雀日記』(『東京日日新聞』他、一九一二年四—五月)。
- (9) 紫明楼主人「京都の新案内記」(『太陽』、一八九五年一月五日号・第一巻第一号)。
- (10) 紫明楼主人「京都の新案内記—承前」(『太陽』、一八九五年三月五日号・第一巻第三号)。
- (11) 以下年代等に関しては、佐和隆・研他編『京都大事典』(淡文社、一九八四年十一月)の「略年表」による。
- (12) ビエール・ロチ『秋の日本』(村上菊一郎・吉水清訳、一九五三年一〇月、角川文庫)「聖なる都・京都」の章。
- (13) 注(11)『京都大事典』の「也阿弥」の項による。
- (14) 平出鏗二郎『京都氣質』(『太陽』一八九五年五月五日号・第一巻第五号)。
- (15) 平出鏗二郎『京都氣質(下)』(『太陽』一八九五年六月五日号・第一巻第六号)。
- (16) 山田美妙『新編漢語辞林』(青木嵩山堂、一九〇四年二月)。ただし、引用は『明治期漢語辞書大系』第五七巻(大空社、一九九六年一〇月)による。
- (17) 松井簡治・上田万年『大日本国語辞典』第二巻(富山房、一九二八年十二月、修正版)。
- (18) 大槻文彦『大言海』第二巻(富山房、一九三三年五月)。
- (19) 三宅青軒『京都の秋冬』(『太陽』、一八九六年一月五日号・第二巻第二号)。
- (20) 無署名「京都行幸啓」(『太陽』、一八九七年四月五日号・第三巻第七号)。
- (21) 高山林次郎『京都帝国大学に就きて』(『太陽』、一八九七年七月二〇日号・第三巻第一五号)。
- (22) 外山正一「京都の教育」(『太陽』、一八九九年六月五日号・第五巻第一二号)。
- (23) 東京非詩人「京都詩人に告ぐ」(『太陽』、一八九九年六月二〇日号・第五巻第一四号)。
- (24) 松川二郎『三都花街めぐり』(一九三二年十一月、誠文堂。ただし、引用はコレクション・モダン都市文化『花街と芸妓』二二巻、ゆまに書房、二〇〇六年十二月)。なお、松川の詳細に関しては、奥須磨子「資料・松川二郎」(『東西南北—和光大

学総合文化研究所年報』、二〇〇五年一月）を参照。

(25) 榎本頼兼「暮らしを守り、未来を切り拓くために」(『KYOTO市民しんぶん』七二九号、京都市広報課、二〇〇三年一月)。

京都府立図書館蔵。この他、「市長からの手紙」魅力あふれる京都を永遠に」(『KYOTO市民しんぶん』七六三号、二〇〇五年一月)でも「千二百年を超える悠久の歴史に育まれた京都は、こうした山紫水明の美しい自然景観や伝統に裏打ちされた文化、芸術など、他に類を見ない魅力を有する都市として、訪れる多くの人々を魅了し続けています」と述べている。

(26) 京都市役所・京都市情報館HP「京都市長のページ」。運営している京都市総合企画局市長公室広報課(電話075-222-3094)に問い合わせて見たところ、現在紙媒体では引用した一文はないという。ただ、「山紫水明」という語句が入った文章なら多くの報告書などによく見かけるといふ話であった。

(ミタニ ノリマサ 兼担研究員)